

検証 9.18 あのスとは何だったのか
The Japan Professional Baseball Players Association strike of 2004
1K03B182-4 南 慶一
指導教員 主査 リー・トンプソン 先生 副査 石井昌幸 先生

あの日本プロ野球選手会のスライキは、日本が真の民主化への道を踏み出す第一歩だった——

I.序論

2004年(平成16年)9月18,19日、70周年を迎える日本プロ野球史上初めての「スライキ」が決行された。この国で久々に話題をさらった今回のスライキ。この前後数ヶ月、一日たりとも紙上・画面上でプロ野球の話題が取り上げられないことはなかった。

それにしても、と私は思った。各メディアのこの話題に対するスタンスが、あまりにも違いすぎる。それに加えて、次々に登場する、今までプロ野球の話をするときにはまず話題に上らなかったであろう組織・人物の数々。私は、どうやらこれはただの野球の話では無いのではないかと考えるに至った。きっと、プロ野球どころか現代日本社会そのものの根幹に関わる出来事だったに違いない。このスライキは一体何だったのか。そして、このスライキは歴史的・社会的にどのような意味をもつのだろうか。

研究方法は、スライキを巡る様々な動きについて「スライキ」「労働組合」「日本プロ野球選手会」「渡邊恒雄」という各要素の定義・歴史等を踏まえた上で、その関係性が内包する矛盾点からそれらがどう繋がっていたか、また今後どう繋がっていくかを明らかにするものとする。

II.スライキとは何か？

まずこの章では、そもそも「スライキ」というものは誰が、何のために、どのようにして行なうものかを明らかにする。藤本武「スライキの歴史と理論」を参考に、スライキの定義、スライキの種類、スライキの戦術をそれぞれ確認する。また同時に、今回のプロ野球のスライキがその中のどれに該当するのかも、明らかにする。

III.労働組合とは何か？

一般的に、スライキを行なう主体となり得るのは「労働組合」である。この章では、労働組合というものがどのようにして誕生したか、また今までにどのような道を歩んできたかについて、その歴史を追う。労働組合が誕生した経緯は国ごとに違うことから、この中では主に我が国の労働組合史を取り上げる。また、今回のスライキの前にも選手会・古田敦也会長が会談を持った労働界の巨大組織「連合」とはどのような組織かについても触れる。

IV.選手会とは何か？

前章で、スライキを行なう主体は「労働組合」であることについて触れたが、今回スライキを行なった日本プロ野球選手会も当然労働組合である。そこでこの章では、具体的に「労働組合日本プロ野球選手会」とはどのような組織か、その結成と交渉の歴史を紐解く。

また、同じくプロ野球選手の労働組合であるMLBの「選手会組合」についてもその歴史を紐解き、日米の選手会でなぜ違いがあるのかについて考察する。

V.「不誠実な交渉」

前章から、日本プロ野球の球団経営者側の交渉態度が「不誠実」であることは、今に始まったことではないということがわかった。では、何年にもわたってその不誠実さを温存する元凶は、いったいどこにあるのか。この章では、長年プロ野球界を牛耳っていると言われて久しいナベツネこと読売新聞社会長・渡邊恒雄氏の歩みから、なぜ彼が権力を持つに至ったのかを探るとともに、彼に代表される権力者の考え方(哲学)とはどのようなものかを考察する。

VI.あのスライキは何だったのか？

ここまでの章をまとめていくと、ある一つの矛盾に突き当たることが判明した。従来日本社会はスライキに対して懐疑的であったはずなのに、どうして今回の選手会のスライキは世論に支持されたのか、という矛盾である。この矛盾を解くためには、インターネットの一般家庭への普及による既存メディアの権力基盤の揺らぎがキーワードとなる。そして、それはすなわち渡邊恒雄の権力基盤の揺らぎと等号で結ばれるのである。

結局今回のスライキは、今までの「少数が多数を動かす」いわば上からの民主主義から、一般民衆がシステムを動かす真の意味での民主主義への変容の予感を告げる画期的な出来事だった。

VII.後記

プロ野球界において実現できたこの流れを、プロ野球界だけのものに閉じ込めておいてはならない。ここ数年プロ野球でチャンピオンになっているのは、現場・経営者・ファンが一体となっている球団である。プロ野球のためにも、日本のためにも、現場に集う人々が主体性を持って行動すべきであろう。

以上